『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』18（2016）：151－183

加賀家文書　翻刻・現代語訳 3　「チヤコルベ」
―蝦夷通辞が記録したアイヌの求婚難題説話―

深澤　美香

キーワード：アイヌ語、加賀家文書、蝦夷通辞、口承文芸

０．はじめに

「加賀家文書」とは、別海町郷土資料館附属施設・加賀家文書館に所蔵・保管される文書である。18 世紀末から 19 世紀にかけて根室場所などで勤務していた蝦夷通辞（日本語とアイヌ語の通訳）が書き残したもので、蝦夷地史料として歴史学者らによって注目をあびてきた資料でもある（深澤 2014a）。加賀家文書にアイヌ語で書かれた資料があるということは、金田一京助をはじめ言語学者にも知られていたが、その研究は殆どされてこなかった。そんななかで早くに目をつけられたテキストが本稿で紹介する「チヤコルベ」というアイヌの物語である。このテキストは浅井 (1972) が翻刻を紹介し、現代日本語訳も試みている。発表されてから 40 年が経った現在、アイヌ語研究の進展によって解明できる部分もあるものと考え、再び筆者によって翻刻・現代日本語訳を試みることにした。

１．書誌的研究

１．１．加賀家文書「チヤコルベ」について

浅井 (1972: 143) は、「加賀屋文書の中のチャコルベ」という題で本テキストを紹介し、「チャコルベ」について次のように述べている。

> 「アイヌ伝承文学」のうちで *cakorpe と呼ばれるものは、現在どの方言にも認められない。しかし道東北部（上川、十勝、釧路地方を合わせてこう呼ぶことにする。以下同じ）には sákorpe（天塩では sakórpe だったらしい―知里真志保「アイヌ文学」p. 117）という名称が残っている。「詞曲」のうち等に「英雄詞曲」（知里真志保「アイヌの神謡」北方文化研究報告 IX p. 13）にあたるものを指すことが多いが、人によっては menoko júkar【menoko yukar】と呼ぶものを単に sákorpe と呼ぶ人も多い。ここで扱う「チャコルベ」に sáke【折り返し】が付いていたかどうか、ついていたとすればどのようなものであったかも不明である。しかし内容と登場人物からみて、この物語が「詞曲」に属し sákorpe と呼ばれていたのではないかと考えられる。

加賀家文書のなかで /sa/ が「チヤ」と表記される例は、ほとんど見られないが、浅井 (1972: 143) の考えによれば、/s/ の口蓋化の強さが影響して「チヤ」と表記されたということになっている。しかし、本テキストにおいて「シ」が /ci/ と同様に解釈されている例（文末註 1 を参照。）があり、そ

れに加えて「チヤコルベ」には「口味持言」という和訳がつけられていることから、音の問題と同様、執筆者である加賀伝蔵が ca-kor-pe「口（の語根）・持つ・もの」と分析的に解釈をほどこしたことに起因している可能性もある。

内容に関しては、求婚難題[1] からはじまり村と村との戦争に発展するというもので、アイヌの英雄叙事詩に共通するようなモチーフが織り込まれている。また語りの形式に関しては、浅井 (1972) で以下のようなことが述べられている。

> しかしここで取扱う「チャコルベ」は主人公の伝承形式をとっていない。また「アイヌ語の古辞古文の最もよい標本である」（金田一京助「アイヌの研究」八洲書房 1940, p. 404）といわれる「蝦夷方言藻汐草」の末尾の「ユーガリ」は３人称で語り始め途中から１人称による表現となっている。
>
> アイヌ伝承文学の１人称による自伝形式がそれほど古くから一般に確立していたわけではないと考えることも、かっては１人称の自伝形式をとらない作品もあったと考えることもできよう。しかし実際に演じられた作品の言葉づかいをそのまま記録したのではなく、語り手からの話の筋を聞きながら筆録したためとも考えられる。いずれにしても３人称で表現されていることがただちに「アイヌ伝承文学」ではありえないことの証左にはならないと考えられる。
>
> （浅井 1972: 133-134）

「チヤコルベ」は登場人物の誰かの視点に限定されて語られてはいかない。求婚難題に立ち向かうオタシュンの旦那がストーリーを進めるキーパーソンになっているが、最後まで「すけべ福者」呼ばわりされるなど主人公と言って良いのか躊躇してしまうような立場にある。

なお、加賀家文書に限らず、江戸時代の古文書におけるアイヌ語の人称表現、特に人称接辞の使い方にはいろいろと問題がある。その理由のひとつに、アイヌ語の人称接辞が日本語の文法体系にはなく、日本語母語話者がアイヌ語学習において最も困難を強いられるものだからである。浅井 (1972) の言うように、これらの伝承が話の筋を聞いて自分たちで清書したものであるとすれば、人称接辞の使い方には伝承形式本来のものと、さらに蝦夷通辞独自のものと、２つの系統が絡み合っていると考えられる。詳しくは別稿に譲るが、文末註でも少しばかり言及した。

１．２．書誌情報

筆者による図版の照合によれば、浅井 (1972) が「チャコルベ」(A) としているものが資料番号

[1] 求婚難題説話については、荻原 (2014) が詳しい。

28、「チャコルベ」(B) が資料番号 31 で、いずれも「菊のかんざしみだれ髪」[2] という日本の口説節をアイヌ語訳したものの後に記載されている。それぞれの書誌情報は次の通りである。

『御手本』（資料番号 31）：

弘化年間～文久 3 年 8 月 (1844～1863) 成立、執筆者は加賀伝蔵。寸法は、縦 25cm、横 17.5cm で、結び綴じの形態をとる。ところどころに遊び紙が入っており、それらと中表紙を除くと 127 丁。表題に『御手本』とあり、場所内の行事や申渡、物語などがアイヌ語と日本語で書き連ねてある。

『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①』（資料番号 28）：

成立年代不詳。執筆者は加賀伝蔵。寸法は、縦 24.7cm、横 17.3cm で、共紙表紙で仮綴じの形態をとる。表表紙は目録から始まっており見返しには見開きの挿絵。裏表紙を除いて 74 丁。

本稿では、『御手本』記載のものを底本とし、アイヌ語カタカナおよび日本語訳が 28 番において異なる場合は脚注に示した。また、アイヌ語の推定に関する詳細は文末註に記した。

２．テキスト紹介 :「チヤコルベ」（資料番号 31）

２．１．あらすじ

我々の沼（シコット）の沼辺に六人の旦那がいた。そのうちの一人の旦那には、六人の娘がいた。一番下の娘は神々に姿形がつくられた美しい娘で、その娘が欲しいがためにオタシュンの旦那が主従を連れ、銘酒を持ってやってきた。沼端には長い莫蓙が敷かれて、その上に酒が運ばれると、沼辺の者たちはこのように言った。

「遠方（オタシュン）の旦那よ。娘が欲しければ、我々の沼の底を娘と一緒にくぐってもう一方の岸から出なさい。そうすれば、代物なしに娘をくれてやる。しかし、それができないなら、娘もやらず戒めてやろう。」

そうしているうちに、娘が先に沼にもぐり、続いてオタシュンの旦那が沼の底へもぐった。旦那がたびたび沼の真ん中で頭を出すので、沼の上に浮かべた舟から六人の小貧乏人が小さい鑓［やり］でめいめいに旦那を突き上げ、五人の悪い女が鎌のような曲がった物でめいめいに突き上げ、旦那をひっかけて舟の中に入れ陸にあげた。それで、沼辺の旦那は、

「私の末娘に泳ぎが劣るので、娘はやれない。」

と言ってオタシュンの旦那を追い出した。旦那は自分の村に帰ると手下どもを集めてこう言った。

[2] 深澤 (2013) によって、アイヌ語の翻刻および現代日本語訳を紹介した。

「あの美人、我から惚れたものとばかり思っていたが、あの娘も我に惚れたようだ。あの娘が水の中で私の手を引っ張るので、我は水の上に顔を出してしまい、それで恥ずかしくもなんの甲斐もなしに帰ってきたのである。これゆえ、そなたたちはどう思うか？ 我は村長であるが、人々が手伝いもせずにいる様子で情けなく思う。あの女と夫婦になれないならば今晩自害しよう。喜ぶがいい。それとも心持ちは変わったか？」

そこで、末席の甥が

「七人の頭領たちよ。一同に沼辺の翁の家に踏み込んで女を横取り、伯父の妾にしてやりましょう」

と言って一族みんなで相談し、その晩すぐに沼辺の村に行った。沼辺の人々はみんな酔っぱらって寝ていた。

甥たちが末娘と女の二人を盗んで、村の小坂の戸に柵をしばりつけていると、矢と弓を持つ番兵がいて沼辺の者が大勢むらがってきた。弓と小さい鑓を突き上げて、大きな危急の声を出し、

「好色な貧乏もの！ すけべ！ 陰門から出たやつめ！ この謀略者め！ 娘を返せ！ そうすれば命は助けてやる」

と言った。オタシュンの人は、

「殺すことができるなら殺してみなさい。女は返さないぞ。始めの床入りより和合の心もよければ、村長の男ぶりも良く髭も美しいので、娘は惚れこんでしまったわい。アハハハハハア。」

と口論をふっかけて、それで戦争が始まった。

沼辺の人々七十人とオタシュンの人々五十人が互いに弓矢で殺し合った。そうしている間、山中の旦那である仲立神が、七十人ばかりの者のイナウを持って、その戦の中に伸ばしてこう言った。

「この戦は双方が悪いと私は言おう。これ以上、私の言葉に知らぬふりをするならば、私が加勢してお前たちの村をみんな切らせましょう。」

その言葉を聞いて、戦をしていた者たちはかぶりものを脱ぎ、頭を下げてかしこまった。沼辺の者たちは、娘の代物として二千俵価という廉価な物をオタシュンの人に要求して受け取り、それで仲直りをし、気持ちも良くなって親戚になったという。

２．２．テキストの表記法

（１）整理番号

原文はテキストの頭に丁数と行数を付している。最初の 2 桁の数字は丁数、「オ」はオモテ、「ウ」はウラを示し、続く 2 桁の数字は行数を表す。「01 オ 02」であれば 1 丁表の 2 行目ということになる。

（２）アイヌ語のローマ字表記

アイヌ語は日本語とは異なる音韻体系をもった言語である。また、執筆者の加賀伝蔵はアイヌ語の母語話者ではなく、アイヌ語の表記にも日本語秋田方言の母語干渉が一部見られる。例えば、日本語秋田方言では /i/ と /e/ を区別しないために、「エ」という文字が /i/ を、「イ」という文字が /e/ を表すこともある。しかしながら、加賀伝蔵のアイヌ語カタカナ表記は非常に規則的であり、カタカナ表記から推定される音素がある程度絞り込める。加賀伝蔵のカタカナ表記と音素表記（ローマ字表記）の対応については、深澤 (2014b) で一応の整理を試みており、本稿のローマ字表記もそれに則る。

（３）編集方針

①小書：

促音の「ツ」が小さく表記されていることがある場合は、出来る限り小書で示すよう努めた。

②繰り返し記号：

縦書きを横書きにしているため、繰り返し記号の「く」と「ぐ」は、「╲╱」と「╲╱゛」で表した。

③字消・書入れ（修正）・併記：

字消は波線で示し、書入れ（修正）や併記はルビで示した。

④写本との相違：

アイヌ語と和訳が、底本 (31) と写本 (28) で異なる場合は《異》として資料番号の「(28)」とともに脚註で示した。

⑤字体：

原則として常用漢字に改めたが、一部旧字体のままにしている箇所もある。

⑥推定形

本文のローマ字表記はカタカナから推定される形であるが、このうち語形の特定が極めて難しいものや、アイヌ語のカタカナからは自然に導き出せない形（校訂を加えた形）については、推定形として箱括弧（[ ]）の中に語形を入れた。

⑦推定に関わる補足：

アイヌ語の音素推定および推定形を導くまでの様々な情報や、検討事項については文末註にまとめた。浅井 (1972) が註で示した解釈についても、採用した場合は多くを引用しているが、筆者と考えや立場が異なる場合は、議論が複雑になるので引用していないこともある。

⑧翻刻：

秋葉実氏が別海町郷土資料館に託した翻刻資料を下敷きに、深澤が原本と照合した。浅井 (1972) も参考にしたが、字体等含め最終的な判断は深澤によるものである。

２．３．翻刻・註釈・現代日本語訳「チヤコルベ」（資料番号 31）

046 オ 01 チヤコルへ[3]

046 オ 02 口味持言

sakorpe

サコロベ

046 オ 03 シコッ　トシヤマ　ユワンニシハ　アナヱケ　子ア　ウトツタ　シ子ニシハ

046 オ 04 彼持領　沼辺に　六人の村長　有けるが　その中に　壱人の村長

ci=kor_ to sama iwan nispa an ayke nea utur_ ta sine nispa

我々の沼辺に、六人の旦那がいたのだが、そのなかの一人の旦那が

046 オ 05 ウヱキン子　ユワンメノコ　ホウ子　コロヱケ　ヨツタ　ホンメノコ

046 オ 06 姉妹揃て　六人の娘　子とも　持たるに　末子　むすめは

ueykinne iwan menoko po ne kor ike [iyotta] pon menoko

揃って［合わせて］六人の娘を子どもとして持ち、一番小さな娘は

046 オ 07 カモイ　ヲロワノ[4]　カトアンカラ　ナンカテ　メノコ　子ークシユ　ヲタシユン[5]

046 オ 08 神々　より　姿拵呉たる　美人の　娘に　候ところ　をたしゆんといふ処の

kamuy orowano katu an=kar [nankante] menoko ne (i)kusu Otasun

神々によってその姿形がつくられた美しい娘であるのでオタシュンの

046 オ 09 ニシバ　シコッ　トサン　コタン　コウウヱカラバ　ラッチトノト

046 オ 10 福者　我等　沼辺の　村江　主従連て集り　銘酒

nispa ci=kor_ to sam kotan kouekarpa, ratci tonoto

旦那が、我らの沼辺（の）村に（主従連れて）集まり、穏やかな酒を

---

[3] 《異》「チヤコルベ」(28)。

[4] 《異》「ヲロワ」(28)。

[5] 《異》「ヲタシユン」(28)。

046 ウ 01 アノコアンテ　シコッ　トシヤクル　ヲレ子　ホンメノコ　ヤエコンルシユイ

046 ウ 02 持参して　我ら　沼辺の村長　方江　小むすめ　自ら所望

an=ukoante, ci=kor_ to sam kur or ene pon menoko yayekor_ rusuy

人々皆で持ってきて、我らの沼辺の者のほうへ末娘を自分のものにしたくて

046 ウ 03 キーワ　クシユ　エ子アンベ　シコットウ　テッ　シヤマタ

046 ウ 04 来着に　よつて　夫れと察し　我沼の　は　たゑ

ki wa kusu ene an pe ci=kor_ to tessama ta

そうしたので、このようなことで我らの沼端に

046 ウ 05 タン子　キナシヨ　アノコトリ　キナシヨトエカ　アントノトルラ

046 ウ 06 長き　蝦夷きな　しきのべ　きな座の上江　持来りの酒運ヒ[6]

tanne kina so an=ukoturi kina so tuyka an=tonotoorura

長い莫蓙が敷かれ、莫蓙の上（に）酒が運ばれた。

046 ウ 07 シコッ　トシヤム　ウタレ　エ子ハウキ　トエマ　ニシバ　チヨカイ

046 ウ 08 持　沼村の　者共　申よふは　遠方の　村長　わたくし

ci=kor_ to sam utar ene hawki i “tuyma nispa ciokay

我らの沼辺（の）人々が申すことは、「遠方（＝オタシュン）の旦那よ、我々（の）

047 オ 01 ボウ子　ホンメノコ　コンルシユイ　コトマンツキ　エ子アンベクシユ

047 オ 02 子の内　末子娘　ほしゑと　あらは[7]　いかにも聞受ましたが

po ne pon menoko kor_ rusuy kotom an ciki ene an pe kusu

子どもである末娘が欲しいようならば、これゆえ

047 オ 03 アシンベ　シヤクノ　コレクニ　エ子アニ　チヨカイ　コロトウ　トモトエ

047 オ 04 女代　なしに　呉べと　思ふ儀ハ左ニ　此方　持の沼　向岸迨

asinpe sak no kore kuni ene an i ciokay kor to tomo tuye

代物なしにくれてやると（すれば）、このように我々が領有する沼を渡り

---

6 《異》「酒運ビ」(28)。

7 《異》「あらば」(28)。

047 オ 05 メノコ　トラノ　ヲラウイワ　　ヲヤトベッ　チヤワ　アントッカ　ツキ
047 オ 06 娘と　　ともに　水の底くぐりて　脇沼の　　端江　　一双ニ出るならハ
menoko turano [orawe] wa oya to petca wa an=tukka ciki
娘と一緒に沼の底をくぐって、（お前たちが）もう一方の沼岸から出れば

047 オ 07 アシンベ　シヤクノ　子ア　メノコ　コレクンベ子　子一コロ　カヱキ
047 オ 08 代物　　なしに　　其　　娘　　呉ましベ　　しかれ　　とも
asinpe sak no nea menoko kore kun pe ne. ne korkayki
代物なしにその娘をくれてやるものだ。しかしながら、

047 ウ 01 子アビ　キー　アヱカブ　コトマンツキ　シヨモ　コレ　カシケタ
047 ウ 02 其事　　てき　　ざれは[8]　　くれ　　ざる　上　　に
[neapi] ki [eaykap] kotom an ciki somo kore kasike ta
それをすることができないようならば、（娘を）やらないうえに

047 ウ 03 ウチヤコク　アンナ　アヱ子　　メノコ　ホシケノ　トウタ
047 ウ 04 せつかんしてやる　　彼是する内ニ　　娘ハ　　さきに　　沼の中江
ucakoko=an na.” ayne menoko hoskino to ta
談判して［戒めて］やろう。」そのうちに、娘は先に沼に

047 ウ 05 ヲラウイコ　ヲウシ　トヱマ　ニシハ　ヲラ　ウイヱケ
047 ウ 06 くゞりこむ　続て　　遠方の　村長　　水の中へくゞりたるが
[orawe] ko ous tuyma nispa orawe ike
もぐり、続いて遠方の旦那が（沼の）底へもぐったが

047 ウ 07 ヱキヤ　ニシハ　アナキ子　マカナンタ　トウヌシケタ
047 ウ 08 彼の　　村長　　は　　度々　　沼の中より
ikia nispa anakne makananta to noski ta
その旦那は度々沼の真ん中で

[8] 《異》「ざれば」(28)。

048 オ 01 ヘトク　アンコ　　キーワクシユ　アシキ子　マトシ　　トカシケ

048 オ 02 身躰　　出顕して[9]　するによつて　五人の　　ふこつ女衆[10]　沼の上

hetuku=an ko ki wa kusu asikne matusi to kasike

頭を出すと、旦那が頭を出すので五人の女衆は沼の上に

048 オ 03 チボ　ヲッテ　ユワンホン　シロンクル　　トウカシケ　チホヲッテ

048 オ 04 船乗て　　六人の小　　貧ぼうやろ共　沼の上　　船乗廻し

cipotte, iwan pon sirunkur to kasike cipotte

舟を浮かべ、六人の小貧乏人が沼の上に舟を浮かべ

048 オ 05 ホン　サン　ハロブ[11]　エウサ　ブシバ　　アシキ子　メノコ

048 オ 06 小　　鑓　　小鉾　　得物を　持て　　五人の　　悪女衆

pon sanparop eusapuspa, asikne menoko

小さな鑓［やり］でめいめい（旦那）を突き上げ、五人の女が

048 オ 07 ウエンベ　レウケ　　アウサ　ブシハ　カモイ　トヽエカ

048 オ 08 鎌又ハ　　曲たる刃物　銘々に　持て　　神住　　沼の上

wenpe rewke (p) [eusapuspa], kamuy to tuyka

悪い物、曲がった（物）［鎌］でめいめい突き上げ、神の沼の上

048 ウ 01 トエマ　ニシハ　エコヘ　トツコ　ユワンメノコ　ウエンベレウケブ

048 ウ 02 遠方の　福者　　顔躰出せバ　　六人の女衆　　鎌のよふなる物て

tuyma nispa ikohetuk ko iwan menoko wenpe rewke p

遠方の旦那が顔を出すと、六人の女が悪い物、曲がった物で

048 ウ 03 エヲコッバレ　チブ　ヲッタ　ヲマレ　ヤタ　ヤンケ　シコット

048 ウ 04 ひっかけ上　　船の　中江引入る　　岡へ　上て　　我　　沼

[eokoppare], cip or_ ta omare, ya ta yanke. ci=kor_ to

（旦那を）ひっかけて、舟の中に入れ、陸にあげた。我らの沼

---

9 《異》「出顕し」(28)。

10 《異》「ぶこつ女衆」(28)。

11 《異》「バロブ」(28)。

048 ウ 05 シヤム　ニシハ　ヱ子ハウキ　チコロ　ホンメノコ　ボカシノ

048 ウ 06 端辺持　村長　申言葉$_{=}$ハ　此方の　小娘よりも　水れんなき

sam nispa ene hawki (i) "ci=kor pon menoko pokasno

辺（の）旦那が申すには、「私の末娘に（泳ぎが）劣る

048 ウ 07 クシユ　メノコ　コレ　アヱカフ　クン　ヱタッ　トラノ　ナニ

048 ウ 08 者ゆへ　娘　呉れる事ならずと　言へ　なから　直に

kusu menoko kore [eaykap]" kun itak turano nani

ので、娘はやれない」と言ってすぐに

049 オ 01 ヲケウヱ　ヲマンヌ　ホシッバレアン　コタンタ　ホシツバ　アンテ

049 オ 02 追いたして　押返されたり　我所$_{江}$　かへ　りて

okewe oman no hosippare. an=kotan ta hosippa=an te

（オタシュンの旦那を）追い出して、旦那は帰された。自分の村に帰ると、

049 オ 03 ウタレ　ケセ　ウヱカレワ　ヱ子ハウキ　イキヤ　ナンカテクル

049 オ 04 手廻り　とも　集めて　申様ハ　彼美婦方へ

utarkes uekari wa ene hawki (i) "ikia [nankante] kur

（旦那は）手下どもを集めてこのように申した「あの美人、

049 オ 05 チヨカイ　ヲロワノ　バテキ　シカビ　クニ　ラムヱケ　ヱキヤ

049 オ 06 我より　ばかりし　ほれたと　思ふて居たか[12]　彼の

ciokay orowano patek sikapi kuni ramu ike ikia

我からばかり惚れたものと思っていたが、あの

049 オ 07 メノコ子　ヤッカヱキ　ヱ子シカビ　コトモア子　ヲルン

049 オ 08 むすめ　よりも　我れにほれて　居と見得て　水の中$_{=}$て

menoko ne yakkayki en=sikapi kotom an eworun

娘であっても我に惚れたようで、水の中に

---

12 《異》「居たが」(28)。

049 ウ 01 ヲラ　ウイカ子　クテキ　コヱケム　クシユ　ベーカタ

049 ウ 02 くゞる　なから[13]　此方の手を引握るによつて　水の上

[orawe] kane ku=teke koekem kusu, pe ka ta

もぐりながら私の手を引き握ったため、水の上に

049 ウ 03 ヘトク　アヱ子　クヤヱ　カッチヤク　ボコノ　アラナシ

049 ウ 04 面出しけるが　我此上ニ　耻をとる　よふにて　何甲斐もなく

hetuku ayne ku=yayekatcak pokono [aranas]

頭を出し、それで私は自ら恥じ入るように、何の甲斐もなく

049 ウ 05 ホシッハ　ルヱ子　タンヘ　クシユ　ヱツウタレ　子コナ　ラムルヱ子ヤ

049 ウ 06 戻たといふ　ものた　爰に　おゐて　其方とも　何と　思わるゝや

hosippa ruwe ne. tanpe kusu eciutari nekona ramu ruwe ne ya?

帰ったのだ。これゆえに、そなたたちどう思うか？

049 ウ 07 コタン　シヤバ子　ツ子　ヤッカイキ　ウタレ　ウカシユカ

049 ウ 08 所の　頭たる　某　なれとも　其許等　能相談手伝も

kotan sapa ne ci=ne yakkayki utar [ukasuy] ka

我は村長であるが、人々が手伝いも

050 オ 01 シヨモ　ヱキカト　ヤヨマフアンナ　子ア　メノコ　トラ　ウムレツクル子[14]

050 オ 02 なく手に入兼候義　恨むなり　あの　女　と　夫婦に

somo iki katu, yayomap=an na. nea menoko tura umurekkur ne

もせずにいる様子で、私は情けなく思う。あの女と夫婦に

050 オ 03 キアヱカッブ　コトマンツキ　タノ　ヲクラ　ヤヱロンノ　アンナ

050 オ 04 ならざるよふ　なれバ　今　晩　自害を　するぞ

ki [eaykap] kotom an ciki tan [ukuran] yayronnu=an na.

なれないようなら、今晩自害するぞ。

---

13 《異》「ながら」(28)。

14 《異》「ウリメ（ムレ）ックル子」(28)。

050 オ 05 ニシヤッテカヤン　ラムサツ子ヤ　　アリ　ハウキ　子ワ　　クシユ

050 オ 06 よろこびやかれ　　こゝろ持一変したるか[15]　如此　村長　　申ける　処

[nisattekka] yan. ramsat ne ya?” ari hawki (i) ne wa kusu

よろこびなさい。心持ちは変わったか？」と村長が申すので

050 オ 07 ヨッタ　ヱキリ　ヱイバケタ　カルク子クル　ヱ子　ハウキ

050 オ 08 ずつと　末座　　より　　甥子なる者　　左ニ　　申けるハ

iyotta ikir [eepake] ta karku ne kur ene hawki (i)

一番列の端っこ［末席］の甥子である者は次のように申した。

050 ウ 01 アルワン　シヤバタラ　ウヱキン子　　トシヤム　チヤ々チセ

050 ウ 02 七人の　　頭達　　一ト勢ニ集り　沼辺村の　老翁家

“arwan sapa utar, [ueykinne] to sam caca cise

「七人の頭領たちよ、一同に揃って沼辺の翁の家

050 ウ 03 ヲレ子　ヱウコ　　アンノ　テレケ　ヱキア　メノコ　　チコモナシ

050 ウ 04 江　　断りなしに　ふみ込んで　　彼　　娘つから　まかせに横取

orene [eukoan] no terke ikia menoko [ci=komonasi]

へ断りなしに踏み込んで、我々はその女を横取り、

050 ウ 05 ケウシト　ウトシ　マツ子　コレナンコンナ　　シ子ウタレ

050 ウ 06 伯父の　　目拭[16]　女房[17]　持せましよといへバ　一族

kewsut utusmat ne kore nankor_ na.” sine utari

伯父の妾［めかけ］として持たせてやりましょう。」（と）一族

---

15 《異》「こゝろ持よかろな（一変したるか）」(28)。

16 《異》「目掛」(28)。

17 《異》「女房ニ」(28)。

050 ウ 07 エシン子　タノヲクラ　ヱ子　子ッコノ　ヱウコラン　コロクシユ

050 ウ 08 一同ニ　今晩[18]（夜）　右之　ごとく[19]　決談　となりて

isinne [tanukuran] ene nekkono eukoramkor kusu

一同で今宵このように相談し（それで決定し）たので

051 オ 01 ナニ　ヲマナヌ　アヱケ　ウタレ　ヲビッタ　ヱホシケ　モコロ

051 オ 02 直に[20]　押寄　たる処ハ　彼　者共　酔　寝て居

nani oman=an ayke utar opitta ihoski mokor.

すぐに行ったところ、人々みんな酔っぱらって寝ている。

051 オ 03 メノコ　トメノコ　アラナシ　ヱシカ　コタン　キロヽ　ケタ

051 オ 04 女　両女　無代に　ぬすみ　居処の　登　小坂に

menoko tu menoko [aranas] eiska, kotan kiroruke ta

女、二人の女を無代に盗み、村の小坂で

051 オ 05 アバ　チヤシ　コシナ　アヱ子　グーコロ　ヱブンキ　アンテ[21]

051 オ 06 戸　垣　拵き[22]　矢と　弓持　番守り　有処へ

apa casi kosina. ay ne(wa) ku kor epunki an te

戸に柵をしばりつけた。（そこに）矢と弓を持つ番兵がいて

051 オ 07 シトッ　シヤム　タラ　ウワッテ　ヱキリ　ランマ

051 オ 08 沼　辺村の　者共　大勢　むらかり　同

[ci=to (or_) sam] utar, uwatte ikiri ramma

我らの沼辺の者たち、その軍勢は同様に

---

18 《異》「今夜」(28)。

19 《異》「ことく〜ロ〜」(28)。

20 《異》「直ニ」(28)。

21 《異》「アンケ」(28)。

22 《異》「拼き」(28)。

051 ウ 01 クー　子ワ　ホンサン　バロブ　ウエサブシバワ　コエカラハンケ

051 ウ 02 弓　と　鑓　鉾　てんでに持て　村近く

ku newa pon sanparop [uewsapuspa] wa [koekari (hi)] hanke

弓と小さい鑓をみなそれぞれ突き上げ、その者たちに出会う近く（で）

051 ウ 03 ヲン子　ベウタケ　アサンケ　ヲカケ　キニン　シロン　クル

051 ウ 04 大きな　持の声[23]　あけて[24]　其後　すけべい　貧乏　者め

onne [pewtanke] a=sanke, okake “kinin sirunkur!

大きな危急の声をだし、そのあと「好色な貧乏者！

051 ウ 05 ウゼングシ　チトシケ　エシラム　シユイブ　メノコ　ホシビレ

051 ウ 06 すけベ　陰門開中ゟ出゛たやつ　たばかり　ものめ　娘　戻しやかれバ[25]

ocinkus! citoske! esiramsuye p! menoko hosipire!

すけベ！陰門から出たやつめ！この謀略者め！娘を返せ！

051 ウ 07 シクノカ　ナンコロ　ヲタシユンクル　ハウキ　ツヘレバ[26]

051 ウ 08 命助けてやるベ　砂油村の者　答けるにハ　ころすに

siknuka nankor.” Otasun kur hawki. “[tuy(e)perpa]

（そうすれば）命は助けてやる。」（と言い、）オタシュンの人は答えた。「切り裂くこと

052 オ 01 アシカイツキ　ツベレバ　ヤン　メノコ　アナキ子　シヨモ

052 オ 01 よからバ　ころしてみれ　娘の　儀は　戻しわ

[easkay] ciki [tuy(e)perpa] yan. menoko anakne somo

ができるなら切り裂きなさい。女は

---

23 《異》「時の声」(28)。

24 《異》「あげて」(28)。

25 《異》「戻しやがれバ」(28)。

26 《異》「ツベレバ」(28)。

052 オ 03 ホシビレナ　メノコ　ウエチウワ　　ウエトモ　ビリカ子

052 オ 04 せぬぞ　　娘[27]　　始の床入より　互ひ　和合の　心よし

hosipire na. menoko ueciw wa uetompirka (p) ne.

返さないぞ。女と初めの床入りで相性も良い。

052 オ 05 マシケノ　ツウタレ　ニシハ　ヲッカイ　カト　ヒリカ[28]　リキカイ

052 オ 06 勿論　　此方の　　酋長　　男ふり[29]　よし　　髭も

maskino ciutari nispa okkay katu pirka. reki kay

非常に我々の旦那は男ぶりもよい。髭も

052 オ 07 エラマシリ　タンベ　クシユ　ホンメノコ　ヲシヌカラ　ニシヤ子ー

052 オ 08 美しゑ　　是によつて　　むしめ[30]　　ほれこんで　しまたわへ

[eramasiri]. tanpe kusu pon menoko [osiknukar] nisa (p) ne.

美しい。これによって、末娘はもう惚れ込んでしまったわい。

052 ウ 01 アハヽヽヽヽア[31]　エバク　　ウチヤタエ　エ子　ヲロワノ　ヤキ子

052 ウ 02 笑る声　　右のことく　口論して　　それよりは

ahahahahahaa.” epak ucataye ine orwano yakne

アハハハハハァ。」前述のように口論してから、それからは、

052 ウ 03 タンベ　シユト子ワ　ウラエキ　ヘトカ　ワンヘ　エ子ホツ

052 ウ 04 此事　　元と成て　　軍を　　始め　　七十人ハ

tanpe sutu ne wa urayke [hetukka] wanpe einehot

これが原因で戦争をはじめ、七十人の

---

27 《異》「むすめ」(28)。

28 《異》「ビリカ」(28)。

29 《異》「男ぶり」(28)。

30 《異》「むすめ」(28)。

31 《異》「アハヽヽヽヽァ」(28)。

052 ウ 05 トウシヤム　ウタレ　ワンベヱレホツ　ヲタシユン　ウタレ

052 ウ 06 沼辺村の　もの　五十人ハ　村方の者ども也

to sam utar wanpe erehot Otas un utar

沼辺の人々、五十人のオタシュンの人々、

052 ウ 07 ウタレ　ウタシバ　ウコアヱ　トッチヤワ　ウコヤヱロンノ

052 ウ 08 双方の者　互ひ　弓矢　射合立さゝり　御互死ニ合

utar utaspa ukoaycotca wa ukoyayronnu

人々が互いに弓矢を射て殺し合う。

053 オ 01 アンベ　ウトッタ　ウキモン　ニシバ　タンベ　アシリカ　ヱシヤヒリ[32]　カモイ

053 オ 02 最中の[33]　間江　山中村の　酋長　これは　また　仲達神

an pe utur_ ta okimun nispa tanpe [asirkar] [esapir] kamuy

その間、山中の旦那、これを改め仲立神が

053 オ 03 ワンベヱ子ホツ　バクアン　ウタレ　ヱナウ　アニカ子　ヌシケタ

053 オ 04 七十人　有来りの者　木幣　持なから　戦ひ中ニ

wanpe einehot pak an utar inaw ani kane noski ta

七十人ばかりの者の、イナウを持ちながらその（戦の）中に

053 オ 05 トリバ　タバン　ルロンベ　ウタシバ[34]　ウヱン　クヱタカ　アッカリ

053 オ 06 割ならび　この　騒動　双方　悪るひ　我ら云ふ事[35]　背ニ

turpa, “tapan rorunpe utaspa wen ku=eytak akkari

それを伸ばし、「この戦は双方悪いと私は言う。これ以上それに

053 オ 07 カシバレ　ヤキ子　クワニ　ウカシユワ　アコタン　トヱバレクンナ

053 オ 08 おゐては　此方　加勢して　其剛勢村の者皆殺するぞ

kaspare yakne kuani [ukasuy] wa a=kotan tuypare kun na.”

知らぬふりをするならば、私が加勢してお前たちの村を皆切らせるぞ。」

---

32 《異》「エシヤビリ」(28)。

33 《異》「最（サ）中の」(28)。

34 《異》「ウタシハ」(28)。

35 《異》「我等云ふ事」(28)。

053 ウ 01 タンベ　ヌワクシユ　ルロンベ　ウタレ　コンチ　アマカ子

053 ウ 02 是を　聞へで　乱さわきの者[36]　かふり[37]　ものをぬぎて

tanpe nu wa kusu rorunpe utar konci ama kane

これを聞いたので、戦をしていた者たちはかぶりものを脱ぎつつ、

053 ウ 03 ヱコヱラチゞワ　メノコ　アシンベ　シ子ワンワナ　ホツチ

053 ウ 04 かしこまる　娘の　代として　弐千俵價の　宝物

ikoeracici wa menoko asinpe sine wan wan hot

頭を下げてかしこまった。娘の代物として二千（俵価）、

053 ウ 05 ヲタシュンクル　ヲゼンクシ　ニシバ　ヲロワノ　シユシヤニレンカ

053 ウ 06 砂油村の酋長　すけべ　福者　より　軽少之宝を

Otasun kur, ocinkus nispa orwano susan irenka

オタシュンの人（である）すけべな旦那から廉価な要求物と

053 ウ 07 シヨコ[38]　ヲマレ　ウサンベ　ハヤヱテ　ヲカケ　ケウトモ

053 ウ 08 送り渡　事済と成　中直り　いたし　其後互_睦敷

[sonko] omare, [usampeepaye] te okake kewtum

（沼辺の人に）伝言が送られてきて、仲直りし、そのあと気持ちが

054 オ 01 ビリカワ　ウアバ子　アナ　カヱナア

053 オ 02 能なりて　親類に　なつたと　云へたし

pirka wa uapane=an akaye na.

よくなって、親戚になったという。

---

36 《異》「乱さわぎの者」(28)。

37 《異》「かぶり」(28)。

38 《異》「シヨヨ」(28)。

３．テキスト解釈にかかわる註

1. **046 オ 03**「シコッ　ト」

浅井 (1972: 144) では Si-kot to （大きな-くぼみ　湖）という固有名詞であり、かつ現在の「支笏湖」とは異なるとして、これを「シコツ沼」と解釈している。伝蔵の和訳には「我等沼」や「我沼」などとあり、浅井 (1972: 145) も「〈わたしたちの沼〉と解釈したものかと思われる」と述べている。本稿では、伝蔵の和訳に準じて ci=kor to （1 複他主=持つ　沼）「我々の沼」 を採用するが、実際に語られた文章が固有名詞 Sikot to であった可能性はある。また、046 オ 04 のみ「彼持領　沼」と訳されており、ここだけは一人称複数除外形主格人称接辞の ci= を意図していたと明確に言い難い。さらに検討が必要である。《類》「シコッ　ト」(046 ウ 01, 046 オ 09, 046 ウ 07, 048 ウ 03)、「シコッ トウ」(046 ウ 03)。

2. **046 オ 03**「シヤマ」

sam-a （～の側.位名-長形）「～の側に」として、ここでは副詞的に用いられていると考える。《類》sam「サン」(046 オ 09)、「シヤ」(046 ウ 01)、「シヤム」(046 ウ 07, 048 ウ 05)、teksama「テッシヤマ」(046 ウ 03)。

3. **046 オ 03**「ウトツタ」

浅井 (1972: 144) と同様、utur_ ta （～の間.位名　で）「～の中で」と解釈した。または、六人の村長の一番末の旦那という意味で utur は「下座」(N) という可能性もあるかもしれないが、釧路方言で「下座」は usar であることに注意が必要である（『八重九郎の伝承』2）。

4. **046 オ 05**「ウエキン子」

浅井 (1972: 144) によって「uikinne←u-e-ikir-ne（みんな列になって）」と解されている。深澤 (2014c: 377) では、これに倣って次のように推定している。《語解》ueykinne【動 1?/副?】（< *u-e-ikir-ne* 互い・に・まとまり・である）集まって、連れだって、揃って。《参考》「Uweikinne-no-an, ウウェイキンネノアン, 絶エザル, 續ケル. *adj.*Continuous.」(B)。

5. **046 オ 05**「ヨツタ」

浅井 (1972: 144) で *yotta という形式があったとしても現在は認められないので iyotta とすると述べられている。iyotta はもともと i=or_ ta (4 他目=ところ.位名　で) が語源と考えられ、y はわたり音であると考えられる。よって iotta が o にアクセントがあるために yotta と発音されたとも考えられる。

6. **046 オ 07**「カモイ　ヲロワノ　カトアンカラ」

ここの 4 人称人称接辞 an= は、orowano 「～から」という斜格の助詞をともない動作主を降格させた非人称受動文の例である。kamuy orowano katu an=kar （神　から　姿.所属　4 他主=つく

る）「神々によってその姿がつくられた」、動作主は kamuy 「神」である。

7. **046 オ 07**「ナンカテ」

浅井 (1972: 144) では「*nankate という形が見当たらないので nankante とする」としており、本稿でもそれに従う。音節末の子音 /n/ が表記上現れていないと思われる例はこのほかにも散見されるが、音韻的に脱落していた可能性もあり詳細は不明。《参考》十勝の帯広と本別で、nankante「美しい」(H; 澤井 2006: 221)。

8. **046 オ 07**「ヲタシユン」

伝蔵は「をたしゆん」や「砂油村」などと和訳をあてており、Ota-sum （砂-油）「オタシュン」という固有名詞と考えていたようである。浅井 (1972: 144) では「otasutunkur〈オタスツの人〉あるいは otasamunkur 〈オタサムの人〉が otasunkur と縮約され、それから逆に otasu という村名ができたのではないかと疑われる」と述べている。浅井の指摘しているように Otasu un kur（オタス　にいる　人）とすれば、「オタス」までが固有名詞であり、語構成上もそのほうが理解しやすい。上述した「シコッ」と同様で、実際に語られた文章と伝蔵の解釈がずれていると考えるべきかもしれない。中川（2015 私信）は、釧路の八重九郎氏が Pon’otasutunkur を縮めて Ponostasun と呼ぶように、音韻的縮約が北海道東部で起こっていた可能性と合わせて考える必要があると指摘している。

9. **046 オ 09**「サン」

sam （～の側.位名）。浅井 (1972: 144) には「/k/ に続くので /m/ が口蓋化した。なお /m/ と /n/ は普通、文節内では閉鎖音の直前で対立を失う」とある。註 2 を参照。

10. **046 オ 09**「ラッチトノト」

浅井 (1972: 145) では「〈ゆっくりと〉酒を汲みかわしたという意味で（のんびり酒）という表現が用いられたのではないか」と説明されている。ratci には「(澱粉が）沈澱する、(水が）澄む（濁りが沈んで)」（田村 1996: 565）という意味があり、そのような沈殿した上澄みの部分のお酒について言ったのかもしれない。《参考》小林美紀氏から ratci tonoto で「平穏なる酒宴」、「穏やかなる酒」(『金田一京助全集』10: p. 656, 710, 1639）があるとご教示いただいた。『アイヌ語音声資料』11 の註では、金成マツの『ユーカラ集』4 において surku sake 「毒酒」の対語として ratci tonoto が使用されていることが指摘されている (p.153)。

11. **046 ウ 01**「アノコアンテ」

浅井 (1972: 145) の an=ukoante 「汲みかわされる」という解釈を採用した。浅井が訳しているように an= はここでは受動態としても訳すことが可能であるが、伝蔵の和訳は能動文で、動作主はオタシュンの従者である。《語解》ukoante（< u-ko-an-te 互い・に対して・ある・させる）互いに酌み交わす。

12. **046 ウ 01**「シヤクル」

註 2 と 9 を考慮すると、/k/ に続く /m/ が口蓋化し、また /n/ が表記上現れないことがある傾向から、sam kur （～の側　人）を表しているのではないかと考えられる。浅井 (1972: 145) では、sa-kur （かしら（？）-人）で「村長」としているが、sa に「頭」という意味はないはずである。そのような表現を用いる場合は通常 sapa ne kur （かしら　である　人）「頭領」などと言う。

13. **046 ウ 01**「ヲレ子」

浅井 (1972) ではこの語を oren と解釈している。しかしながら、中川 (1982: 235) では「子の字が用いられている他の 59 例は、すべて他方言の形より考えて /ne/ の音節を表していると思われる」と述べ、旭川や白糠方言に見られる orene （or-ene ところ.位名-へ）であると指摘する。wa の前は「ヌ」になることもあるが /n/ は通常「ン」で表すため、筆者もこれに同意する。なお、向格助詞の方言差と歴史的変遷についての詳細は中川 (1982) を参照のこと。

14. **046 ウ 01**「ヤエコンルシユイ」

浅井 (1972: 145) と同様 yayekor_ rusuy とする。《語解》yayekor【動 2】（< yay-e-kor 自ら・について・持つ）～を自分の物にする。

15. **046 ウ 01**「テッ　シヤマ」

「テキ　シヤマ」ではなく「テッ　シヤマ」と表記されていることからも、teksama ではなく tessama であった可能性がある。釧路の八重九郎氏や、白糠の四宅ヤエ氏は tessama と言う（『八重九郎の伝承』3、『四宅ヤエの伝承　韻文編 1』など）。

16. **046 ウ 05**「アノコトリ」

浅井 (1972: 145) の ukoturi を採用する。an=ukoturi は浅井の訳で「しきのべられ」と受動文になっているが、伝蔵の和訳はやはり能動文になっている。ここも註 11 と同様、動作主はオタシュンの従者。

17. **046 ウ 05**「アントノトルラ」

浅井 (1972:145) では tonoto-rura といい tonoto を抱合した 1 項動詞として考えられているが、他動詞に用いられる 4 人称人称接辞 an= がついていると考えれば、an=tonoto-o-rura （4 他主=酒-に-運ぶ）という 2 項動詞と解釈することになる（中川 2015 私信）。なお、註 11 と 17 と同様であるが、浅井の訳では「運ばれた」と受動文になっているが、伝蔵の和訳は能動文であり、動作主はオタシュンの従者である。

18. **046 ウ 07**「チヨカイ」

浅井 (1972: 145) では、「雅語で 1 人称複数形が単数に用いられるのは普通である。しかし代名詞的な ciokaj【ciokay】〈わたしたち〉が人称接語の ci-【ci=】と同様に用いられることは少ない。ただ十勝方言では ci-poho【ci=poho】〈わたしたちの子〉が ciokaj póho【ciokay póho】という

形でも用いられる」と述べられている。例文は次の通り：ciokay poho anak sonno rametok okkay ne a kusu orowano eykostek isounkur_ ne 「うちの子はほんとうに勇敢なものだったので、それからはとても運のよい狩人になった」（浅井 1972: 145-146；ローマ字表記は一部深澤によって修正した）。

19. **047 オ 03**「アシンベ」

浅井 (1972: 146) では asinpe について caranke に負けた方が出す賠償金のことで、ここで asinpe と言うのは不自然だと言われている。しかし例えば、加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」においては、家から追い出した清三に戻ってきてもらい娘の婿にするという時に、この asinpe（和訳では「不礼申訳の進物」）を清三の家に贈っている。不自然であるかどうかはさておき、asinpe がこのように人と交換されるもの、代償として用いられているという点で共通しており、今後さらに注意深く見ていく必要があると考える。

20. **047 オ 03**「チヨカイ」

註 18 と同様の用法。

21. **047 オ 05**「ヲラウイ」

浅井 (1972: 146) では「*orawe あるいは *orauj【*orauy】という形式があったかも知れないが、似た形式としては現在 oraje【oraye】（上川）と erawo（十勝、釧路）が認められるくらいである。ここでは oraje【oraye】〈もぐる〉の方をとっておく」としている。しかしながら「ウイ」という表記から推定されるのは、やはり uy や we という形式であり（深澤 2014b: 52-54）、本稿では orawe を「潜る」と考える。《参考》「ルイ子」ruwe ne（『学校往来夷解書』40 番：03 オ 06）（深澤 2014c）。

22. **047 オ 05**「アントッカ」

ここでは an=tukka （4 他主=生やす）と考える。an= について、浅井 (1972: 146) は「不定人称で、主語あるいは動作主を限定しない」用法としているが、限定するとすれば動作主はオタシュンと娘であり、またセリフ文中であるので 2 人称のように解釈したいところである。

23. **047 ウ 01**「子アビ」

neap であれば「子アブ」と書くだろうから、その所属形で neapi を意図しているのではないだろうか。ただし用例は見つかっていない。

24. **047 ウ 03**「ウチヤコク　アンナ」

浅井 (1972: 147) に「ucakoko〈談判する〉」とある。cakoko は北海道の東部方言であり、西部方言では pakasnu という語彙を使用する。また、4 人称人称接辞自動詞主格の =an に終助詞の na がついて意志のモダリティを表すような用法となっている。この用法は、加賀家文書のなかによくみられる。《語解》ucakoko【動 1】(< u-cakoko 互い・を罰する）談判する。《参考》kesta an ko urayke

patek ucakoko patek ki ayne 「毎日、戦争や談判ばかりある」（山本 1957: 21 ローマ字表記と和訳は深澤による）。

25. **047 ウ 05**「ヲラウイコ」

「ヲラウイ」は註 21 を参照。「コ」は接続助詞の ko であろう。田村雅史 (2010) によれば ko は釧路、白糠、美幌、八雲、幌別に見られる語形であって、「前件は既に実現した事態を表し、後件の事態は前件に依存として起こる事態を表す。いわゆる条件表現の事実的用法を表し、前件に対する後件の依存度合いは高い。」と定義づけられる。

26. **047 ウ 05**「ヲウシ」

ous は浅井 (1972: 147) で位置名詞の os 「～の後」と考えられているが、ここでは副詞と解釈する。《参考》ous【副】[o-us その尻・につく] その後、この後 (沙 T)。

27. **047 ウ 07**「エキヤ」

浅井 (1972: 147) と同様 ikia と解釈する。《参考》「ikia イキア 【連体詞】用例数：101 その（文脈中のある人／ものを指す。生物や神を修飾する例が多い。単数形）」(静 Ok)。

28. **047 ウ 07**「マカナンタ」

浅井 (1972: 147) では『バチェラー辞典』の用法を採用しており、深澤 (2014c: 381) では次のように解釈した。《語解》makananta【副詞】（< makan-an-ta どのように・ある・時）ある時。《参考》「Makananda, マカナンダ, 或時.【中略】adv. Sometimes.」(B)。

29. **048 オ 01**「ヘトク　アンコ　キー」

浅井 (1972: 147) は 0 項動詞である hetuk だとしているが、本稿では 1 項動詞の hetuku と考え hetuku=an ko とした。また、その後の ki は代動詞で、前の hetuku=an を表すと考える。接続助詞の ko については註 25 を参照。=an が表す動作主は、オタシュンの旦那である。

30. **048 オ 01**「マトシ」

浅井 (1972: 147) は、「現在の話し手には該当する語は認められないが、tus は「相妻」であるという（知里真志保「分類アイヌ語辞典」Ⅲ. p. 524）ので、ここの部分を asikne mat tusi と解釈する。」としているが不明。伝蔵の和訳によれば「ぶこつ女衆」のこと。ジロラモ・デ・アンジェリスの「第二蝦夷報告書」（児玉 1941、チースリク 1962、中川 1988）に見られる “menocoxi” や『松前の言』の「メノコシ」は、推定形が menokosi と考えられ、 si は日本語の「衆」からきていると言われる。ここではそれらと同様に「マトシ」も mat(u)「女」-si「衆」で「女衆」となっているのではないかと考えた。

31. **048 オ 03**「チボ　ヲッテ」

浅井 (1972: 147) の cip otte 「舟を浮かべる」を採用する。

32. **048 オ 05**「ホン　サン　ハロブ」

伝蔵の和訳によれば「小鑓　小鉾」。「ホン」は pon「小さい」であろうが、「サンハロブ」が不明である。浅井 (1972) は/-n s-/ が /-y s-/ になるという音韻変化を考慮して canparop としているが、ここではカナの通り san のままにしておく。「ハロブ」に関しては 1792 年に刊行された日本語・アイヌ語辞典『藻汐草』に以下のような例があり、それと同じものと考えられる。《参考》「鑓　パロー▲ヲプ」(U 藻)、「鑓　バロー◯ヲブ」(Kg 藻)。

33. **048 オ 05**「エウサ　ブシバ」

浅井 (1972: 148) は、「e-u-sa-puspa は「てんでに振り上げる」とでもなろうか。eusapuspa は〈みんなで持つ〉意味だと説明された方もあったが例文は得られなかった。とりあえず〈てんでに持つ〉としておく。」としており、本稿ではつぎのように考える。《語解》eusapuspa【動 3】(< e-usa-pus(u)-pa ～で・めいめいに・を浮き上がらせる・複数）～でめいめいに突き上げる（？）。

34. **048 オ 07**「アウサ　ブシハ」

「ア」は人称接辞かもしれないが、浅井 (1972) と同様「エ」の書き誤りの可能性として捉えることにした。よって、註 33 と同じく推定形を [eusapuspa] 、「めいめい突き上げられ」としている。《類》「エウサ　ブシバ」(048 オ 05)。

35. **048 ウ 03**「エヲコッバレ」

浅井 (1972) では eokotpare としているが、本稿では別の解釈をとる。また、北海道東部方言の音韻的特徴として、/-k p-/ は /-p p-/ に逆行同化したものと考える。《語解》eokoppare【動 3】(< e-ok-ok-pa-re ～に・ひっかかる・重複・複数・させる) ～を…にひっかける、～を…でひっかける。

36. **049 オ 01**「テ」

北海道東部形式で tek にあたる接続助詞と考えられる。ただし、ここは「テキ」ではないため、樺太方言と同じように te という形式をとっていたという可能性も考えられる。

37. **049 オ 05**「シカビ」

「菊のかんざしみだれ髪」において、「シカビ」に「ほれた」と訳が与えられている（深澤 2013: 305）。浅井 (1972) では旭川方言話者である砂沢クラ氏が「シカビとは好きになることだと思う」と説明してくださったと報告している。《参考》狩野 (2007: 31) に wenpe uesikapi で「素行のない者同志相親しむ。」とある。

38. **049 オ 07**「エ子シカビ」

浅井 (1972) は/-n s-/ が /-y s-/ になるという音韻変化を考慮して、ここの箇所は、ene sikapi 「かくほれた」としているが、伝蔵の和訳によると「我れにほれて」とあるため、en=sikapi を意図しているのではないかと考えた。sikapi については註 37。

39. **049 ウ 01**「コエケム」

表記上の問題ではなく、koehekem が koekem と音が約まっている可能性を考え koekem という形を採用した。《語解》koekem（< ko-e(he)kem に対して・を引っ張る）【動 3】～のほうへ～を引っ張る。《参考》ehekem「～を引っ張る」(Ok)。金成マツの『ユーカラ集』4、「朱の輪 (Kemka Karip)」 に類似の表現がある : Oyarorunmat オヤルル姫/ santeke の手の指を/ uwekari いっしょに / a=toykokisma 我しかとつかんで/ a=sikoehekem kane 我が方へ引っぱり寄せ (p. 322)。

40. **049 ウ 03**「ヤヱ　　カッチヤク」

《語解》yayekatcak【動 1】(< yay-e-katcak 自分・について・見かけが悪い) 自ら恥じ入る。

41. **049 ウ 03**「アラナシ」

この語については未詳。推定形として [aranas] をあげたが形態素分析まで至っていない。051 オ 03 にも同様の表現が見られる。伝蔵の和訳によると、「何甲斐もなく」、「無代に」とある。

42. **050 オ 01**「ヤヨマフアンナ」

yayomap=an na の =an na は、047 ウ 03 の用法と同様。註 24。

43. **050 オ 05**「ニシヤッテカ」

nisat は「夜が明ける」などという意味であるが、「喜ぶ」という意味で使っているようである。ここでは使役形の他動詞が使われており、直訳すると「(人) を喜ばせる」になる。ここでは、相手に対して「喜びなさい」と言っている箇所なので本来は nisat tek yan で良いところであると思われる。《語解》nisattekka【動 2】(< nisat-tek-ka 喜ぶ？・さっと～する・使役) （人）を喜ばせる。

44. **050 オ 05**「ラムサツ子ヤ」

「こゝろ持一変したるか」という和訳が付けられている部分であるが、ramsat の意味がはっきりしない。ram が「心」、sat が「乾く」なので「(心が) 渇望する」という意味であろうか。《参考》『沙流方言辞典』に ram(u) satka で「～を喜ばせてだます（ぬか喜びさせる)」という 3 項動詞が報告されている。

45. **050 オ 07**「エイバケ」

推定形は [eepake] としたが、[eepaki] の可能性もある。《参考》『地名小辞典』に、美幌方言において eepake が「端」という意味であることが報告されている。

46. **050 ウ 03**「エウコ　アン」

推定形は [eukoan] としたが不明。「断りなしに」という和訳がついているものの、どこからそのような意味が出てくるのかはっきりしない。《語解》eukoan【動 2】(< e-u-ko-an ～について・互い・に・ある）～に皆でいる（？)。

47. **050 ウ 03**「チコモナシ」

ci=komonasi であろうか。ci= は「我々が」としたが、現代アイヌ語では「聞き手を含まない私た

ち」という一人称除外形が ci= だと考えられており、ここでは聞き手を含んでいるので合わないことになる。浅井 (1972: 152-153) によれば、これが本来の ci= の用法で、「聞き手以外でも、話し手の意識の中で誰かを明確に除外していれば対立形が用いられることがある」という。これについてはさらに検討が必要と考えられる。《語解》komonasi【動 2】(< ko-mon-asi ～に対して・手・立てる）～を横取りにする。～をつかむ。

48. **050 ウ 07**「エシン子」

isinne は、樺太方言に見られる語形。《参考》「Ishinne, イシンネ, 皆, 凡. *adj*. All. Altogether. Syn: Ishine.」(B)。また、ピウツスキによって、isine や isinne は “all, together, altogether” と報告される (Majewicz&Majewicz 1986: 210)。

49. **051 オ 03**「アラナシ」

註 41 を参照。

50. **051 オ 03**「エシカ」

「～を盗む」を表す語には方言差が見られる。浅井 (1972: 153) では、釧路で esika が用いられると報告があるが筆者は未見。《参考》「盗む」の他動詞として eikka（八, 幌, 沙, 帯 H)、eiska（美 H)。

51. **051 オ 03**「キロヽ　ケタ」

カナ表記を重視して kiroruke ta としたが、kiroru は普通名詞として知られている語であり、文法的には位置名詞の ka が後続する kiroru ka ta が望ましい。kiroruke は、kiroru を位置名詞として考え、-ke がついた長形と考えることになる。

52. **051 オ 05**「テ」

註 36 を参照。

53. **051 オ 07**「シトッ　シヤム」

カナ表記から推定して、ci=to (or_) sam であろうか。文法的には ci=to sam で良いところと思われるが未詳。

54. **051 ウ 01**「ホンサン　バロブ」

註 32 を参照。

55. **051 ウ 01**「ウエウサブシバ」

048 オ 05 と 048 オ 07 にも類似の語形がみられる。eusapuspa に相互態の u- がついた 2 項動詞と考え、推定形を [uewsapuspa] とした。註 33 を参照。

56. **051 ウ 01**「コエカラハンケ」

浅井 (1972: 154) では koekarpa (r)anke 「～に集まりながら」としているが、ranke と解釈するには r の脱落が説明できなければならない。ここでは koekari (hi) hanke「出会うところの近く」

としたが、カナ表記から推定される形は koekar(a) hanke であって、やはり完全に説明できてはいない状況である。《参考》「出会う」koekari (旭, 名 H), ukoykare (宗 H)。hanke「近い」(N)。

57. **051 ウ 03**「アサンケ」

浅井 (1972: 154) では、an= が子音の前で a= と交替する方言もあるということで a=sanke としている。/n/ が表記されていないか、音自体が脱落しているかわからない例というのは、例えばこのテキスト内でも、051 ウ 03 の「ベウタケ」(pewtanke) や、053 ウ 07 の「ショコ」(sonko)、046 オ 07 と 049 オ 03 の「ナンカテ」(nankante)、050 オ 03 と 050 ウ 07 の「ヲクラ」(ukuran) などがある。そのため、「アサンケ」という表記で an=sanke を表している可能性もあるのだが、今後の検討課題としてひとまず an= と a= の二つの形式を区別しておくことにする。

58. **051 ウ 03**「キニン」

《参考》kinin 「淫情」(歳 N)、「好きな同士が一緒に寝る、同衾（どうきん）する（いい言葉）」(沙 T)、「性交（する）」(沙 Ky)、「好色である、浮気である、うきうきする」(美 C 人)。

59. **051 ウ 05**「ウゼングシ」

ocinkus は未詳であるが、浅井 (1972: 154) の解釈を参考にした。《語解》ocinkus【動 1】(< o-cin-kus ～の尻・上脚・を通る) 股の間を通る。すけべ。《参考》類似する語に次のようなものがある。hocinuturkuste【動 2】「[ho-cin-utur-kus-te 尻・上脚・の間・を通る・させる] 股（また）の間を通す／にはさむ」(沙 T)。《類》「ヲゼンクシ」(053 ウ 05)。

60. **051 ウ 05**「チトシケ」

citoske! は悪口の一種。浅井 (1972: 154) によると「釧路でも男女を問わず、子供に対して用いられたというが、意味は判然としない」ということである。《参考》citoske「膣＜女陰の内部．女の陰部女に対する悪口」(沙 Kb)、「膣の内部め！」(幌 C 人)。

61. **051 ウ 05**「エシラム　シユイブ」

esiramsuye p! は和訳では「たばかりものめ」となっており、謀略者であることをののしっている場面である。siramsuye「考える」(沙 T) に充当態接頭辞の e- 「～について」がついた形であろう。浅井 (1972: 154) は、十勝、釧路で esiramusuye が「しらばっくれる」や「あさってのことを言う」という意味の形式になっていることを報告しているが、筆者はまだ確認できていない。

62. **051 ウ 07**「シクノカ」

siknuka は siknu 「生きる」に他動詞形成接尾辞の -ka がついた形。北海道西部方言では siknure 「～を生かす」(沙 T) を使用する箇所であろう。《参考》siknuka「～を生かす」(静 Ok)。

63. **051 ウ 07**「ツヘレバ」

「殺す」という意味で一般的に使用される語は rayke（複数形は ronnu）である。浅井 (1972: 155) は、tuyperpa で「ずたずたにする」という合成動詞であるという解釈をしている。それによれば、

「ツ」が tuy(e)「～を切る」(N) であり（e は脱落したと考え)、「ヘレバ」が perpa「～をこわす」(N) や「破る、割る」(T) と考えることになる。tuy(e) の /y/ に関しては、例えば 049 ウ 07 や 053 オ 07 の「ウカシユ」が ukasuy を表すことができるのであれば、「ツ」で tuy を表すこともできるということになるだろう。「ツ」は ci を表すこともできるので、1 人称複数除外形の人称接辞がついた ci=perpa「我々がこわす」や中間態の接頭辞のついた ci-perpa「こわされる」という案もあるが、文脈に合わない。よって、ここでは浅井 (1972) の解釈を採用する。

64. **051 オ 01**「ツベレバ」

註 63 を参照。

65. **052 オ 03**「ウエチウ」

「ウエチウ」には「初めの床入り」という和訳が付けられており、以下のように解釈する。《語解》ueciw【動 1】(< u-e-ciw 互い・の頭・をさす）初めの床入り。《参考》uweciw 「(次の表現で）婚礼の...。uweciw sake」(沙 T)、ueciw「かぶさり合う」(静 Ok)。

66. **052 オ 03**「ウエトモ　ビリカ子」

浅井 (1972: 141, 155) では uetumupirkane「具合がよくなった」「ともにそれで気分がよくなる」と解釈されているが、そもそも pirka にコピュラの ne が後続した語構成は類例をみない。アイヌ語の pirka は「良い」「良くなる」の両方を表す 1 項動詞であるが、後者を表す際に日本語の母語干渉によりコピュラの ne を付加させてしまうことは､現代のアイヌ語学習者にも見られる誤りである。本稿では uetompirka で 1 項動詞とし、コピュラの ne はここでは日本語の母語干渉により過剰に挿入されたか、あるいは表記上には現れていないが p ne 「～のだ」という形式を表そうとしたものかもしれない。解釈は、伝蔵の和訳を尊重して以下のようにする。《語解》uetompirka【動 1】(< u-e-tom-pirka 互い・について・中ほど・良い）互いに相性が良い。

67. **052 オ 05**「マシケノ」

浅井 (1972: 155) は、「maskino〈あまりにも〉は連用修飾形式とみられるが、ここでは文頭にたって接続詞的な機能も果たしていると考えられる」と述べているが不明。和訳に「勿論」とあるので、そのような考えに至ったのではないかと思われる。《参考》maskino「あんまり」(沙 Kb)。

68. **052 オ 05**「ツウタレ　ニシハ」

ciutari nispa で「我々の旦那」という意味を表している。ciutari は 1 人称複数（除外形）の人称代名詞であり、帯広 (H)、名寄 (H)、本別（澤井 2006）見られる語形である。046 ウ 07 で代名詞が人称接辞のように用いられる例が示されているが、ここも同様の用法である。通常は、ci=kor nispa となることが予測される。註 18 を参照。

69. **052 オ 05**「カイ」

「～も」や「～か」を表す副助詞。北海道の大多数の方言では ka、東部方言の帯広 H, 本別（澤

井 2006），白糠（田村 2010）などでは kay という形式をとる。

70. **052 オ 07**「エラマシリ」

浅井 (1972: 155) では十勝や釧路などと同様の形式である eramasure をたてている。しかしながら、カナ表記から母音の u は推定されない。本稿では、深澤 (2014c) における考えを引き継ぎ [eramasire] や [eramasiri] を推定形にたてる。

71. **052 オ 07**「ヲシヌカラ」

浅井 (1972: 155) は osiknuka という語形をたてているが、名寄に uosiknukar「なじむ」(H) という語形が見出されることから、本稿では [osiknukar] とした。

72. **052 オ 07**「ニシヤ子ー」

nisa (p) ne としたが nisa は助動詞であり、コピュラの ne は余剰に見える。註 66 と同様に p ne「～のだ」の可能性を示したが、実際のところは不明である。《参考》nisa「【助動】今...してしまった、最近...し終わったどころである」(沙 T)。

73. **052 ウ 01**「ウチヤタエ」

浅井 (1972: 155) と同様、ucataye (美 H) と同様の形式と考える。《語解》 ucataye【動 1】(< u-ca-(e)taye? 互い・ロ・を引っ張る）ロ論する。

74. **052 ウ 01**「ヲロワノ　ヤキ子」

浅井 (1972: 155) は、ここの yakne「もし～すれば」(T) が anakne「～は」(N) と同じく副助詞のように用いられていると指摘している。和訳も「それよりは」となっており、本稿でもその解釈をとった。

75. **052 ウ 03**「ウラヱキ　ヘトカ」

urayke hetukka とした。《参考》木が伸びることや草などが生えることを hetuku (八, 幌, 沙 H) といい、木が伸びることを宗谷方言では hetukka (H) と言う。それに加えて『アイヌ民族文化財ユーカラシリーズ 22：天にいる男　天にいる女』に、ukohetuku （< u-ko-hetuku 互い・に・生える）という語で戦争がはじまる表現がある：sirus tumunci 大変な戦い/ sirus rorunpe 大きな戦争/ ukohetuku はじまっていて (p. 87)（: 87；アイヌ語の表記は深澤が変更）

76. **053 オ 01**「アシリカ」

浅井 (1972: 156) と同様に asirkar と考える。しかしながら、カナ表記からは語末の /r/ が有るとは言いきれない。《参考》asirkar で「To make over again. To renew.（改める、新しくする）」(B) 。

77. **053 オ 01**「エシヤヒリ」

「菊のかんざしみだれ髪」では「シヤビリ　カモヱ」で「仲に立神」とあり（深澤 2013: 316）、それに接頭辞の i- か e- がついたものと考えられる。この語に関する詳細は不明で、語構成もよくわからない。推定形はカナ表記から [esapir] とした。

78. **053 オ 07**「カシバレ」

《参考》kaspare「～に知らんふりをする」(静 Ok)。

79. **053 オ 07**「ヤキ子」

ここの yane は、052 ウ 01 とは異なり接続助詞として解釈できる。註 74 を参照。

80. **053 オ 07**「アコタン　トヱバレ」

浅井 (1972: 156) では kotamtuypare「～に対し刀にずたずたに切らす」という動詞であると考えられているが、和訳から考えても、「コタン」は kotan「村」であると考えられる。また、ここの動作主は kuani「私」で、和訳も能動文であることから、 tuypare「切らせる」が kotan を抱合した kotantuypare という動詞に a= という 4 人称人称接辞がついていると考えるのではなく、a=kotan で「貴方の村」という解釈をとった。

81. **053 ウ 01**「アマ」

《参考》ama「～を置く、（着ているものを）脱ぐ」(静 Ok)。

82. **053 ウ 03**「エコヱラチヾ」

ikoeracici とし、以下のように解釈する。《語解》ikoeracici【動 1】(< i-ko-e-racici それ・に対して・頭・だらりと下げる) それに対して頭を下げる（かしこまる)。《参考》heracici は 1 項動詞で「頭をダラリと下げている」(T)。道東方言では音節頭の h が落ちやすいので、eracici となっていると考えられる。

83. **053 ウ 03**「シ子ワンワナ　ホツチ」

2000 のような大きな数の表し方については、あまり報告がない。『方言辞典』には tuik (幌)、hotneik (帯)、tuwantanku (ラ) とある。浅井 (1972: 156) には「人によって〈100〉を atuj【atuyta の誤りか？】 あるいは wanwan などという。ここでは sine wanwan hot （1・10・10・20〉〈2000〉と解釈する」とある。アイヌ語は二十進法であり hot が 20 を指し、200 は、10(wan)×20(hot) で wanhot (幌, 沙, 美, 名 H) である。1000 に関して 5(asikne)×10(wan)×20(hot) asikne wanhot (B, H) という言い方も報告されている。よって、1 (sine)×10 (wan)×10 (wan)×20 (hot) の sine wan wan hot も原理的には考えられる表現となる。

84. **053 ウ 05**「ヲゼンクシ」

註 59 を参照。

85. **053 ウ 05**「シユシヤニレンカ」

susan irenka とした。《参考》susan は、「Common. Cheap.（普通の、安い)」(B) であろう。irenka には「意向、掟、法律」(N) や「申し立て、主張」(T) という意味があるが、ここでは「要求」と考える。

86. **053 ウ 07**「シヨコ」

28 番では「シヨヨ」となっており、どのように考えるべきか悩ましい箇所である。浅井 (1972 156) では、so が合成語において「負い目、負債」の意味を持ちうるとして sokoomare「支払う」と解釈しているが未詳。

87. **053 ウ 07**「ウサンベ　ハヤエテ」

[usampeepaye] te としたが不明。te に関しては註 36 を参照。《語解》usampeepaye【動 1】(< u-sampe-e-paye 互い・心・に・行く）仲直りする。

88. **054 オ 01**「ウアバ子　アナ　カエ」

uapane=an akaye とした。《語解》uapane【動 1】(< u-apa-ne 互い・親戚・になる) 親類になる、親戚になる。《参考》akaye は釧路などで使われる形式で、yak a=ye（と　4 他主=言う）「～という」から語彙化されたもの。間接話法で用いられる。

謝辞

当翻刻は、秋葉實氏の翻刻資料（別海町郷土資料館所蔵）および浅井 (1972) の翻刻とアイヌ語解釈をもとに筆者（深澤）が原本と摺合せ、加筆・修正を施したものである。別海町郷土資料館の石渡一人氏には資料・情報提供でお世話になった。アイヌ語の解釈では、中川裕先生からご助言頂いたものに中川（2015 私信）と記した。そのほか小林美紀氏をはじめ 2015 年度千葉大学中川ゼミの学生・院生にも情報提供いただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

本原稿は前号に掲載予定だったが、先行研究である浅井 (1972) に遠く及ばない状況だと筆者が判断し、一度辞退したものである。浅井 (1972) は、母語話者へアイヌ語の解釈に対する意見を求め、情報を得ている点で優れており、また細かなところでは色々あるけれども一行が丸ごと抜けているなどの重大な翻刻ミスはない。

本稿と異なる点として、浅井 (1972) は「正しいアイヌ語」に執着しすぎているあまりに、アイヌ語カナ表記や伝蔵の和訳を大きく無視して、アイヌ語のローマ字化と現代語訳を与えてしまっていることがある。本稿は、あくまでもカナ表記と原典の和訳を重視して、伝蔵がどのようにアイヌ語を考えていたのかということに焦点を当てている。確かに、あるアイヌ語方言の記述、あるいは多くの方言に共通するアイヌ語の文法からすれば、「正しいアイヌ語」ではないと判断される部分もあるかもしれないが、浅井 (1972) のように本稿では逐一言及していない。

当初は 2015 年春に他界された秋葉氏への追悼として贈りたいと考えていたが、筆者の力不足のせいで 1 年が経過してしまった。秋葉氏は筆者が加賀家文書のアイヌ語の研究を進めていく原動力であり、大きな支えであった。その偉大な存在を胸に、今後も古文書の研究を続けていけたらと考えている。

略号

〈出典略号〉

(B) /『バチェラー辞典』	バチェラー、ジョン『アイヌ・英・和辞典』第 4 版.
『地名小辞典』	知里真志保『地名アイヌ語小辞典』
(C 人)	知里真志保『知里真志保著作集別巻 II：分類アイヌ語辞典人間編』
(H) /『方言辞典』	服部四郎（編）『アイヌ語方言辞典』
(Kb)	久保寺逸彦（編）『アイヌ語・日本語辞典稿』
(Kg 藻)	加賀家文書「藻汐草［写］」
(Ky)	萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』
(N)	中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』
(Ok)	奥田統己『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROM つき）』
(T) /『沙流方言辞典』	田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』
(U 藻)	上原熊次郎『藻汐草』

〈方言略号〉八：八雲/ 幌：幌別/ 沙：沙流/ 歳：千歳/ 静：静内/ 帯：帯広/ 美：美幌/ 旭：旭川/ 名：名寄/ 宗：宗谷/ 樺：樺太（ライチシカ）/ 千：北千島（シュムシュ島）

参考文献

浅井亨 (1972) 「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』6: 131-162. 北海道大学.

荻原眞子 (2014)「求婚難題・婚姻闘争・雌雄選択」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』16. pp. 1-11. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

金成まつ (1964)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』4. 三省堂.

――― (2000)『アイヌ民族文化財ユーカラシリーズ 22：天にいる男　天にいる女』北海道教育委員会.

金田一京助 (1993) 『金田一京助全集』10. 三省堂.

児玉作左衛門 (1941) 「デ・アンジェリスの『蝦夷国報告書』に就いて」『北方文化研究報告』4.

田村すず子 (1998) 『アイヌ語音声資料』11. 早稲田大学語学教育研究所.

田村雅史 (2010) 『アイヌ語白糠方言の文法記述』(博士課程学位論文). 千葉大学大学院社会文化科学研究科.

田村雅史ほか (2011) 『四宅ヤエの伝承 韻文編 1』四宅ヤエの伝承刊行会.

チースリク (1962) 『北方探検記』吉川弘文館.

中川裕 (1982) 「アイヌ語の助詞 un に関する一考察」『言語学演習 ’82』東京大学言語学研究室.

――― (1988) 「アイヌ語と接触した外国人：世界最初のアイヌ語記録者アンジェリス」『国文学解釈と鑑賞』53/1. 至文堂.

深澤美香 (2013) 「加賀家文書　翻刻・現代語訳 1　「菊のかんざしみだれ髪」：蝦夷通辞によるアイヌ語版「お吉清三」口説」『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』15. pp. 295-321. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

――― (2014a)「加賀家文書のアイヌ語資料と加賀伝蔵」『千葉大学大学院人文社会科学研究科　研究プロジェクト報告書 274 集：アイヌ語の文献学的研究(1)』pp. 21-48. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

――― (2014b) 「加賀家文書における表記の特徴と傾向：ローマ字表記への試み』『千葉大学大学院人文社会科学研究科　研究プロジェクト報告書 274 集:アイヌ語の文献学的研究(1)』pp. 49-72.

――― (2014c) 「加賀家文書　翻刻・現代語訳 2　「学校往来夷解書」：蝦夷通辞によるアイヌ語版 「寺子教訓書」」『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』16. pp. 353-391.

山路廣明・山本多助（編） (1957) 『アイヌ・モシリ』2. アジヤ・アフリカ言語研究室（私家版）.（再版：浦田遊（編） (1998) 『アイヌ・モシリ　幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会.）

辞書・語彙集

上原熊次郎 (1792) 『藻汐草』（復刻：(1972)『アイヌ語資料叢書　藻汐草』国書刊行会.）

奥田統己 (1999) 『アイヌ語静内方言文脈付語彙集（CD-ROM つき）』札幌学院大学.

加賀伝蔵（1800 年代）「藻汐草［写］」（資料番号 49）

萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂.

狩野義美 (2007) 『新冠・静内地方のアイヌ語・郷土史話・随筆集―わが思い出―』私家版.

久保寺逸彦（編） (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道文化財保護協会.

澤井春美 (2006) 『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集：本別町・沢井トメノのアイヌ語』北海道立アイヌ民族文化研究センター.

田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.

知里真志保 (1975)『知里真志保著作集別巻Ⅱ：分類アイヌ語辞典人間編』平凡社.（初出：(1954)『分類アイヌ語辞典人間編』日本常民文化研究所.）

――― (1984) 『地名アイヌ語小辞典』復刻版. 北海道出版企画センター.

中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.

バチェラー・ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典』第 4 版. 岩波書店.

服部四郎（編） (1964) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.

（著者不詳）（推定 1700 年代）『松前の言』（復刻： (1972) 『アイヌ語資料叢書　松前の言：ゑそことはの事』国書刊行会.）

Majewcz, A. F. & Majewcz, E. (1986) An Ainu-English Index-Dictionary to B. Piłsudski's Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore of 1912. Poznań:Adam Mickiewicz University Press.

（ふかざわ　みか・千葉大学人文社会科学研究科／日本学術振興会特別研究員）

The Kaga Family's Archives - Reprint 3
The Ainu heroic epic "Cakorpe (Sakorpe)"

FUKAZAWA Mika

Summary

The Ainu epic "cakorpe" was recorded by Kaga Denzo (1804-1874), who worked as an interpreter between Ainu and Japanese in Nemuro (the eastern mostpart of Hokkaido), Japan. Asai (1972) has already interpreted this text since 40 years ago, however, now we can give it another interpretation referring to the recent studies of the Ainu language.

"Cakorpe" has not an apparent hero, but the man in Otasun is a key person in this story. The outline of the story is as follows: The man in Otasun wished to marry a young beautiful lady in the lake-side village, and then he faced the impossible task which the lake-side people set. Because they interfered with his success, he could not bring her to the village of Otasun. After that, a battle occurred between Otasun and lake-side village. The man-God from the mountain arbitrated between the two villages and they were finally reconciled with each other.